



モア通信 No.13

2020年3月31日

●外国人福祉委員とは～

外国にルーツのある高齢者や障害のある方を対象に、関係機関や家族、ご本人からの依頼に応じて、ご自宅を訪問、あるいは電話や来所にて相談をお聞きし、活動を行います。

外国語ができなくてもOK。日本に長年滞在されていて、日本語がわかる方も多くおられます。

ただ、文化的背景がちがうため、日本の制度が分からなかったり、難しい日本語が理解できないため、生活に困ることがあります。

★交通費程度の活動費が支給できます。

★簡単な講座を受けていただき、登録の上、必要時に活動いただきます。

●活動内容

①電話相談

電話でご相談をお聞きします

②傾聴活動

来所や自宅にてゆっくりお話をお聞きします

③その他の支援

既存のサービスや制度ではまかなえない部分の支援～病院や役所などに同行し、手続きなど一緒におこないます

④通訳

医療機関や役所等で、ご本人の意見や思いを通訳し、安心して利用できるようお手伝いします。

★文化的背景がちがっても、自分らしく生きることのできる生活を応援します～

ニンビーの私を考える

京都モアネット共同代表 加藤 博史

中国武漢から始まった「新型コロナウイルス感染症」が、2020年の1月には、世界的流行(パンデミック)となりました。SARS のときも、コウモリを食べたハクビシンを中国の人たちが食べ、そこに寄生していたウイルスが突然変異して、人間の免疫機能で対応できない肺炎を引き起こしたわけです。こんども、野生動物が媒介しているのでしょうか、詳しくはわかりませんが、ウイルスも細菌も人間が生まれる以前の遙か昔から存在し、さまざまな生物に寄生し、進化を遂げてきました。

長年、自身が癌で苦しんだスーザン・ソングは、私たちが病気に「特別な意味」を付与していることを『暗喩としての病い』を著して示しました。暗喩(メタファー)とは、例えば、「あいつは会社の癌だ」といった表現方法です。ハンセン病も統合失調症も、社会的排除のための「暗喩」として、機能してきました。こんどのウイルスは、どんな「暗喩」なのでしょう。

武漢が都市ごと隔離されました。「中国人お断り」の風潮も広がっています。このことで想起されたのは、ハンセン病の人たちの「島の収容所」への隔離です。ハンセン病は、らい菌(マイコバクテリウム・レプラ)の感染によっておきますが、感染力は弱く、栄養状態とも関連しています。1943年に治療薬が開発され、戦後、日本にも普及しましたが、「業病」との暗喩は払拭されず、隔離は続きました。私たちは、その歴史から何を学んだのでしょうか。

京都市でも、「中国人と気づかれると特別な目で見られるので喋らないようにしている」という人が出てきています。怖いのは、パッシングする私たちの心です。

ニンビー(NIMBY)という言葉があります。ノット・イン・マイ・バックヤードの略で、「わが家の裏にはゴメン」「必要なのは分かるが他所でやって」という意味です。異質なものを近辺から排除しようとする力、周辺に追いやる力、隔離しようとする力は、こんな心から生まれます。異質なものを同質化させるのではなく、異質なままに活かす社会(インクルーシブ社会)は、自分のなかのニンビーを自覚し批判することから形成されます。

モアネットが大切にしてきたものは、地域の一番マイノリティ(社会的・市民的権利を剥奪・制限されている人)の眼差しに立ち、「マイノリティを創り出している責任が私にもある」という《責任当事者としての意識》を、マイノリティとの対面交流を通して学んでいくことです。衝突・トラブル(コンフリクト)こそ、関係性の理解を深めていく「ラッキーなチャンス」でしょうね。そして、ほんの少しだけ、重荷を分かち持ちたいものです。

「つながるフォーラム part 1」

(2018年3月2日)

地域で暮らすことの安心、近所でつながる力

～「困った」が言える地域づくりって?～

山口浩次さん(大津市社会福祉協議会)



山口浩次さん

山口さんがコーディネートしてくださった、楽しい参加型研修でした。グループ内で互いの自己紹介をし、「自分のまち」について、自慢できること、どんなまちになったらいいか、そのためにどんなことができるかを出し合いました。「助けて」が言える(弱さを公開できる)、自分ごととして考え、「出す」、「聴く」、そして「しゃべる」ことが大事、とのこと。制度には限界があります。周りに目を向け、困っている人やSOSが出せない人のことを想像し、私一人ではできなくても、力を合わせ、人間力でつながり、提案を具体化すれば、前進するんだと教えてもらいました。

山口さんが大きな影響を受けられた「熊沢名誉相談員」さんは、アルコール依存症との闘いの中で、いろんな「愛言葉」を残してくれたそうです。

★「聴くが効く」…聴いて聴いて、聴くことが、その人にもっとも効くんだ

★「困った時はまあええか」(5回言う)…困った時の魔法の言葉

★「みんな一緒にぼちぼちいこか」…肩の荷を分かち合おう

「スマホ」ではつながっていない、本当の「つながる力」を、次世代に伝えようとのあたたかいメッセージでした。

●どんなまちになったらいい？

- ・挨拶ができる
- ・気にかけてくれる人がたくさんいる
- ・孤立のない地域
- ・子どもが安心して外で遊べる
- ・防災に強い
- ・おすそわけできる
- ・安全、きれいなまち…

●そのためにどうしたらいい？

- ・集まる場所づくり(映画観賞会、母親の集まり、悩みごとしゃべり場、ごはん会、まつり、体操、コミュニティ花壇、酒飲み会…)
- ・地域であいさつ
- ・中学生福祉委員(役割を持つ)…



フォーラムの様子

2019年度総会(2019年6月15日)とその後

当日は、運営委員、多文化福祉委員15人が参加した。総会議事を終えた後、モアお茶会大型バージョンとして、京都モアネットの数年間の活動を振り返り、その存在と活動の意義をふりかえった。

モアお茶会は、2016年から月一回、多文化福祉委員が集まり、日々の活動を報告しあい、時には学習会も取り入れながら、情報交換の場になっている。多文化福祉委員の活動は、事務局と情報共有しながらも、単独での行動になる。対象者と関わる中で多文化福祉委員が一人で抱えないよう、孤立しないよう、顔を合わせて活動を共有することが大切な場となっている。

ある福祉委員は、長年、一人暮らしをしている在日一世の女性宅を訪問し、体が不自由になってから、食べなれた朝鮮料理が作れなくなったからと、パンチャン(おかず)を作って持っていき、話をして帰る活動を続けてこられた。対象者が入院され、訪問はできなくなったが、近くに暮らす人に「たくさん作ったからこれ食べて」と持ち合い、「醤油無いから貸して」と近所で行き交える、コリアン文化で言う、「トンネ」と言われるつながり、そんなイメージで在日コリアン高齢女性に寄り添い続けた。

また他のメンバーは、在日コリアン二世の男性宅に数年訪問している。その男性は一人暮らし。大家の事情で長屋から引っ越し、玄関から一人で電動カートに乗り移れず、家に籠ることが多くなった。訪問し始めた頃は、共通点もなく、話に困るようだったが、歌を一緒に歌おうと誘うと意外に大きな声で歌ったり、買物に出かけると、「これ、買ってあげるわ」と逆に気にかけてくれ、ゆっくりゆっくり関係を築いている様子が報告された。

昨年4月から入国管理法改定により新たな形で外国人労働者を受け入れることになった日本社会で、私たちの地元の区役所の住民課でも様々な外国人が同行の日本人に案内されて手続きをする姿をよく見かけるようになった。

京都モアネットは2006年に立ち上げ、14年目になるが、私たちが活動してきた経験やネットワークを活用し、観光客ではなく、仕事で暮らす外国人を社会で受け入れる体制づくりに何かお手伝いができればと、この一年間、運営委員会等で話し合ってきた。昨年4月23日京都市介護ケア推進課とモアネット事務所で話し合いを持った。京都市との協働事業として進めてきた私たちの活動と経験、そして国際化推進室や既存の外国人ネットワークを活用して、介護、福祉関係の現場で外国人が従業員として関わることに京都市として積極的な施策をすすめるよう提案した。

12月19日には加藤博史先生と事務局で京都市介護ケア推進課と同様の話し合いを持ち、地域包括を通じて、福祉現場で働く外国人について調査などを行っているか聞いた。京都市からは、地域包括から何点か報告は上がっているが、特に予算措置されていない中で、外国人受け入れについて積極的に施策をとる余裕はなく、そのような課題

毎月の お茶会

(情報交換や勉強会)
楽しくやっています



多文化福祉委員で集まっています
興味のある方はご連絡ください

おしらせ
「つながる」フォーラム
part2
が延期になりました…

外国にルーツのある子どもと親への支援活動「大阪Minami子ども教室」を主催している金光敏さん(コリアNGOセンター)にお話しいただく予定でしたが、コロナウィルス感染拡大防止のため、急遽中止にしました。来年度に予定しています。改めてご連絡いたします。

があがってきても、それに対応しきれない現状だという話だった。

京都モアネットは、これまで、在日コリアン高齢者や障害者の孤立を防ぎ、制度では賄えない、また地域社会にとけこみにくい外国にルーツのある人の支援や、地域の橋渡し活動を続けてきたが、これから多文化になるであろう(と期待する)地域社会の一役を担えたらと思う。

(事務局 鄭明愛)

これから出番が増えること間違いなし！！

多文化福祉委員として活動してみませんか？

事務局 南珣賢（なむ・すんひょん）

モアネットも14年目に入り、その活動が特別永住者である1世から2世へ、ニューカマー韓国人高齢者やコリアンルーツ以外の国籍や背景をもつ人たちへと変化しています。

私の活動は1980年代に日本に渡ってきた韓国人高齢女性—「新たな1世」との関わりで、そのほとんどが夫を亡くした後のひとり暮らしに困っている人たちです。買い物や移動は大丈夫でも、役所での手続きや受診など、コミュニケーションが大事な場面や生活に困りごとが起きると、今まで頼っていたパートナーがいないことで援助が必要になります。

地域包括支援センターなどからの依頼で活動が始まるのですが、最初から私たちを受け入れてくれるケースばかりではありません。制度や公共のサービスがよく理解できないにもかかわらず、自分の生活を守るために他者の介入を拒むのです。

それでもめげずに必要なタイミングで訪問し、特に助言や勧めなどはせず、そばにいるよう心がけ、根気よく関わっていくとそのうち少しずつ頼ってくれるようになります。そして徐々に閉ざしていた心を開いてくれます。介護認定を受け、看護師やヘルパーが訪問するようになると生活に変化が現れます。その段階で私たち多文化福祉委員は一定の役割を終えたものと考えられますが、しかしそうはいきません。彼女らの生活は既存のサービスだけでは補えないことであふれています。ケースワーカーの訪問時や、通院時の言葉の問題、在留許可やパスポートの手続き、故郷に住む家族への伝達…。介護保険の法改正によって訪問ヘルパーの活動が制限されると、その分モアネットが忙しくなったり…。訪問頻度は変わっても継続的な関わりは切れません。

2006年3月、総務省は「地域における多文化推進プラン」を策定し、多文化共生アドバイザー制度が創設され、地域の多文化共生の担い手となる自治体や国際交流協会、NGO、NPOスタッフから多文化共生マネージャーを育成しています。

ちょうど同年、京都市の委託事業としてモアネットが設立されました。地域住民や福祉関係者が多文化福祉委員となり、様々な背景を持つ人たちが制度や地域から取りこぼされないよう地域密着でサポートしてきました。年間平均約5,000件と、数多くの事例と向き合い多文化を支えるパイオニアとして地域で貢献しています。

自治体が仕組みを構築することと同様に、多様な背景を持つ人が困った時にすぐに駆けつけ地道に支え続ける人の存在が不可欠です。地域での多文化化が本格的に進む中、今後のセーフティーネット構築にモアネット多文化福祉委員の実践が必ず役立つことでしょう。

ともに活動できる仲間、大募集しています！多文化福祉委員として活動してみませんか？



2018年度の活動(2018年4月～2019年3月)

1. 多文化福祉委員派遣事業

登録している多文化福祉委員が以下の生活支援活動を行いました。電話で相談を受けて情報提供するほか、関係機関からの依頼で、自宅を訪問し、安否確認や、簡単な日本語での話し相手、傾聴、生き甲斐支援等を行いました。また、定期訪問が必要で、孤立しがちな人については、介護保険事業所やその他の関係機関と連携しながら見守りを行いました。そのほか、日本語がうまく話せない人には、医療・福祉・住宅関係者への通訳や、母国語での傾聴を行いました。2018年度は、17人の福祉委員が72人に対しての1177件の生活支援活動を行いました。

2. 多文化福祉委員の研修

現在活動している多文化福祉委員を対象に、7月と3月に講座を行いました。7月は、金城学院大学の朝倉美江さんに、文化が異なっても住みやすい地域コミュニティや、多文化に理解のある支援者養成の必要性についてお話いただきました。また、3月には「つながるフォーラム part1」を企画、大津市社会福祉協議会の山口浩次さんに、「困った」と言える地域や環境づくりについて参加型研修を行いました。それぞれ、外国にルーツのある高齢者問題について、参加者と意見交換を行いました。

また、多文化福祉委員で毎月1回お茶会を行って、活動報告・情報交換や他の外国人支援などに関する学習を行いました。

3. 多文化福祉委員活動の整備・充実化に向けて

2月に第12号通信を発行しました。運営委員会は随時行い、大学研究者も含め、活動の充実化に向けて話し合いました。

4. 外国籍住民理解に向けての啓発活動

総会や養成講座の場などでモアの活動について紹介し、支援の必要性について伝えました。

5. 他の外国人支援団体との連携

京都市国際交流協会の「きょうと多文化支援ネット」や「ハナネット」に事務局メンバーが参加し、事業協力、外国籍市民や在日コリアン支援グループと情報交換を行いました。

7月と2月には、きょうと多文化支援ネット主催で、親や自身の高齢化問題について、講演とグループワークを行いました。

★きょうと多文化支援ネットワークホームページ
<http://www.kcif.or.jp/HP/jigyo/katsudo/jp/shien-net/>

支援内容内訳

福祉サービス紹介・指導	介護保険	受付相談	0
		サービス利用・内容	1
		その他	0
	生活保護		0
	高齢者福祉		0
	障害者福祉		1
	その他の保健福祉サービス		0
	小計	2	
相談内容		安否確認	1008
		生活相談	932
		家族関係相談	326
		人間関係相談	263
		生きがい相談(趣味活動)	195
		こころの相談	339
		経済面の相談	21
		言語・コミュニケーションの問題	133
		民族文化・歴史等の問題	146
		健康(病気・体調)相談	807
		栄養食事関連相談	242
		その他	35
	小計	4447	
関係機関との連絡調整	役所	福祉事務所	7
		その他(保健センター・健康保険関係等)	9
		自治会、地域団体など	0
		民生委員・老人福祉員	0
		社会福祉協議会	0
		介護保険関係	142
		障害福祉関係	23
		その他(ライフライン・業者・家族・近隣住民等)	162
	小計	343	
直接対応	緊急対応	病院・診療所への連絡	2
		警察・消防署出動要請	0
		病院受診同行・入退院手配など	38
		通訳(医療・行政・ライフライン等)	28
		家事援助	11
		身体介護	11
		その他(外出同行、歌を歌う等)	120
	小計	210	
	合計	5002	

京都モアネット役員

2018年度収支決算書
(2018年4月1日～2019年3月31日)

(単位:円)

【顧問】

小澤 亘(立命館大学教授)
 田中 宏(一橋大学名誉教授)
 仲尾 宏(京都造形芸術大学客員教授)
 水野直樹(立命館大学文学部客員教授)
 金 政弘(大韓国民団京都府地方本部団長)
 金 尚一(在日本朝鮮人総聯合会京都府本部委員長)
 鄭 禧淳(NPO 法人京都コリアン生活センターエルファ顧問)

【共同代表】

加藤博史(龍谷大学名誉教授)
 紫 松枝(在日本朝鮮人総聯合会京都府本部常任委員)
 金 周萬(大韓国民団京都府地方本部)
 朴 錫勇(札の辻診療所所長、
 NPO 法人京都コリアン生活センターエルファ理事長)

【運営委員】

加藤博史(兼任)
 紫 松枝(兼任)
 金 周萬(兼任)
 朴 錫勇(兼任)
 岡野英一(龍谷大学教授)
 南 珣賢(NPO法人京都コリアン生活センターエルファ理事)
 宋 基和(大韓国民団京都府地方本部南支部副支団長)
 石川久仁子(大阪人間科学大学准教授)
 金 洋子(たんぽぽ助産院顧問)
 金 秀煥(朝鮮総聯南山城支部委員長)
 村木美都子(NPO法人東九条まちづくりサポートセンター
 まめもやし事務局長)

【会計】

金 洋子(兼任)

【会計監査】

叶 信治(希望の家カトリック保育園園長)

【事務局長】

鄭 明愛(NPO 法人京都コリアン生活センターエルファ理事)

科目	金額	
1. 収入の部		
京都市助成金		1,120,000
賛助寄付金	769,710	
会費	13,000	
団体会費	0	782,710
預金利息	29	
雑収入	0	29
当期収入合計 (A)		1,902,739
2. 支出の部		
1) 福祉委員派遣事業に係る費用		
・報酬費	618,000	
・上記に関する交通費	80,300	
・連絡調整費	180,500	
・事務費	17,483	
・通信費	41,951	
・賃借料	600,000	
・雑費	0	1,538,234
2) 福祉委員養成講座		
・活動費	38,400	
・通信費	0	
・雑費	7,020	45,420
3) 啓発・ネットワーク事業		
・活動費	68,496	
・講師謝礼	40,000	
・通信費	29,032	
・交通費	70,640	
・事務費	3,560	
・雑費	1,188	212,916
当期支出合計 (B)		1,796,570
当期収支差額 (A)-(B)		106,169
前期繰越差額		2,079,965
次期繰越額		2,186,134

〒601-8022 京都市南区東九条北松ノ木町 12
 京都コリアン生活センターエルファ内
 京都外国人高齢者・障がい者生活支援
 ネットワーク「モア」(京都モアネット)
 TEL 075-681-2721/FAX 693-2555
 Email kyotomorenet@yahoo.co.jp
 郵便振替口座:00990-4-314429
 加入者名:京都外国人高齢者障害者
 生活支援ネットモア
 ♡支援カンパよろしくお願ひします♡

編集後記
 ▼今、在日コリアン二世以降など、日本で生まれた外国ルーツの人以外に、さまざま理由で海外から日本に移ってきた人が増えており、生活上の「困った」が生じています。子どもが生まれた時、障がいを持った時、高齢になった時……。何に困っているかがわからず、思うように生活できないと感じている人もいます。そんなとき、身近に、同胞だけでなく日本人がいれば、とても助かります。▼日本語が話せない人、日本語は話しても読み書きが難しい人、日本語を忘れた人。そんな人に出会った時、まずは気にかけて知ろうとすることで、何に困っているかに気づいていくのです。▼互いの距離を縮めるお手伝い役「多文化福祉委員」の活動、これからも応援よろしくお願ひします!(み)